

心のどこかにいつもある詩

タイトル&作者一覧

雨ニモマケズ 風ニモマケズ（「雨ニモマケズ」/宮澤賢治） I was born さ。受身形だよ。（「I was born」/吉野弘） それから酒屋をたたきおこしたのだ（「系図」/三木卓） 自分の住むところには 自分で表札を出すにかぎる。（「表札」/石垣りん） いそがなくたっていいんだよ（「南の絵本」/岸田衿子） 大人になってもどぎまぎしたっていいんだな（「汲む」/茨木のり子） のだのだのだともそうなのだ それは断然そうなのだ（「なのだソング」/井上ひさし） 正しいことを言うときには 少しひかえみにするほうがいい（「祝婚歌」/吉野弘） わたしを束ねないで（「わたしを束ねないで」/新川和江）

生ましめんかな 生ましめんかな 己が命捨つとも（「生ましめんかな」/栗原貞子） 君死にたもうことなかれ（「君死にたもうことなかれ」/与謝野晶子） 死んだ男の残したものは ひとりの妻とひとりの子ども（「死んだ男の残したものは」/谷川俊太郎） 何が面白くて駝鳥を飼うのだ。（「ぼろぼろな駝鳥」/高村光太郎） 自分の感受性くらい 自分で守れ（「自分の感受性くらい」/茨木のり子） 万有引力とは ひき合う孤独の力である（二十億光年の孤独）/谷川俊太郎 山林に自由存す（「山林に自由存す」/国木田独歩）

おまえは歌うな（「歌」/中野重治） うさぎに うまれて うれしい うさぎ（「うさぎ」/まど・みちお） また春になってしまった（「春の問題」/辻征夫） 父さんはおまえに菖蒲の笛を聴かせよう（「初節句」/大木実） もはや できあいの思想には寄りかかりたくない（「寄りかからず」/茨木のり子） われは草なり 伸びんとす（「われは草なり」/高見順） きつぱりと冬が来た（「冬が来た」/高村光太郎）

本を読もう。

もっと本を読もう。

もっともっと本を読もう。（「世界は一冊の本」/長田弘）

太郎を眠らせ、太郎の屋根に雪ふりつむ。（「雪」/三好達治） 女に二時間待たされたからて 死んだ男がおるやろか（「葉月」/阪田寛夫） ごらん なさいだいいびなのように わたくしたちがならんですわったござのうえ（「ふゆのさくら」/新川和江） なつめにしまっておきたいほど いたいけな孫むすめがうまれた（「森の若葉」/金子光晴） ピールには枝豆 カレーライスには福神漬（「ほほえみ」/川崎洋）